

工芸ニュース休刊について

'73 デザインイヤーは、さまざまな論議の跡を残しながらも、いちおう成功裡に終了した。なかでも ICSID 国際デザイン会議が、かつてない多数の海外諸国からの参加者を集めて、盛大に開催された事実は、わが国のデザイン界が、すでに欧米先進国のそれと比肩しうるまでに発展したことの国際的承認であり、さらに今後の日本の動向に対して、彼らが大きな関心をもって注目していることの証左ともいえる。日本デザイン学会が、最近、日本学術会議の登録学術団体として正式に認定されたことも、デザインイヤー中の特筆すべき出来事の一つであった。いわゆる学際的（インターディシプリナリ）な研究に対する認識と評価が高まりつつある今日、元来このような性格をもっていたデザイン関係の諸々の研究が、ようやく一つの学問領域として公的に認知されたことを意味する。このような時期において、本誌<工芸ニュース>が一時休刊しなければならないことは、何としても残念というほかはない。

衆知のとおり、最近の物価狂乱が出版界全般に与えた影響は相当なものであるが、ことに本誌のような専門雑誌の類が、これによって受けた打撃は大きい。なかでも本誌の場合は、国立研究機関による編集という立場上、これまでも営利本位の編集をつつしみ、一部の商業誌にみられるような時流便乗的あるいは大衆迎合的な取材を避けてきたし、他方、本誌の発行を担当する丸善株式会社においても、本誌の公共性を考慮し、売価、広告収入等に関するかなりの制限条件の下で、商慣習を無視した採算上の無理を強行してきた。そして、このような姿勢がすでに限界状態に達していたことも事実であった。

けれども、このような姿勢を根底からくずすことは、それほど簡単ではない。ことに編集方針の変更は、われわれ編集担当者の基本的デザイン観およびデザイン界の現状と今後の動向に対する評価と予測に関わる重大問題である。いま昭和7年創刊以来、現在に至る本誌の歴史をふりかえってみると、その時代時代において編集を担当された先輩諸兄の編集方針には、かなりの変遷があったことは確かだが、こうした変化の背後に、つねに時代先行的な姿勢が一貫して流れていることも、各時期の取材内容から察知できる。たとえば、一時盛んだった“海外のデザイン紹介”は、昭和20、30年代というわが国デザイン界の啓蒙期・成長期においては、まさに時代先行的姿勢の一つの現われであった。また“プラスチックなどの新材料および成形・加工技術の紹介”も、わが国が産業合理化につづいて新技術導入に狂奔していた時代における、デザイナーのための不可欠な先行情報であったといえる。しかし、現在われわれが立っている時代の状況は、もはやこのようなものではない。海外からの技術導入よりはその自力開発に、またメーカー・ニーズよりはユーザー・ニーズの方に社会の関心は集まりつつある。最近の本誌の編集方針もまたこの線に沿って、主として国内のさまざまな実験的研究に取材の焦点を合わせ、記事内容も、デザインの結果や加工技術よりはむしろデザイン・プロセスに、なかでもその基盤となるべきニーズ解析やデザイン方法論を重視してきた。このような編集方針が、結果的には取材範囲を狭めることになり、幅広い知識欲をもつ読者を十分に満足させなかったことを、ある程度は承知していたが。

ともあれ、以上の主として経済上の止むを得ない理由で、しばらく休刊せざるを得ないけれども、デザインと名のつく雑誌が、わが国においても、また世界的にも数少ない今日の状況において、デザイン情報の広報という本誌の責務の重大さは誰にもまして痛感しており、近い将来、万難を排して再刊に漕ぎつける努力をお約束するとともに、その手段、方法などについて、読者諸氏のご教示、ご支援を切望するものである。

編集委員会